

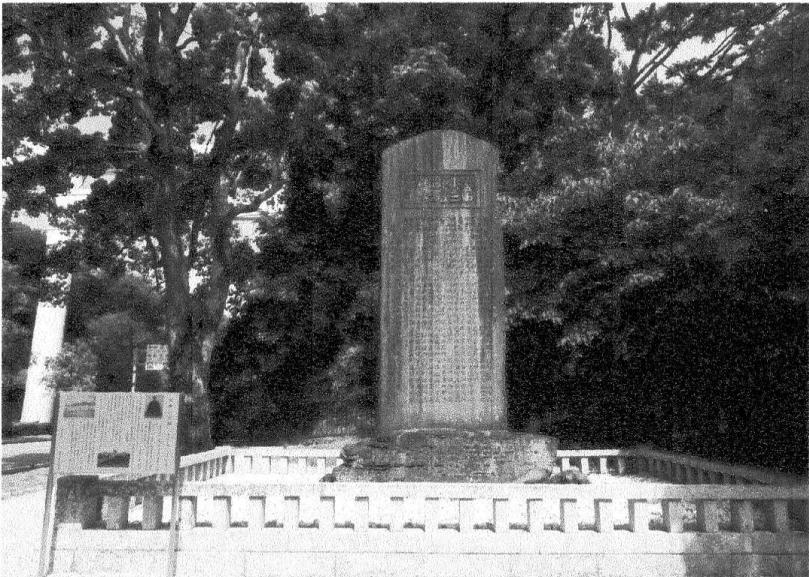
# 伊勢を創った太田小三郎 青春記

現代御師再考塾 太田小三郎研究室

秋 田 耕 司

はじめに

御幸道路倉田山の大鳥居のそばに太田小三郎君紀功碑が建立されている広場があるが、令和元年（二〇一九）九月に神宮司庁によつて、玉砂利が敷き詰められ、清浄な雰囲気に整備されたことは小三郎ファンにとって誠に喜ばしい限りである。その碑の説明文などに解説されているように、太田小三郎は九



太田小三郎君紀功碑(伊勢市楠部町)

相応しい人物である。

しかし、九州生まれの小三郎がなぜ、伊勢に定住してこのようなことをなし得たのか、について語る資料はなかなか見つからない。そこで、憶測の域を越えない点は多々あるが、史実を背景に、限られる資料を突き合わせて、小三郎が九州で誕生してから古市妓楼「備前屋」の主人になるまでの青春期を考察する。

小三郎誕生と背景

小三郎は備前屋の主人になる前は鷹羽匡一（以下、「匡一」という）と言つた。幕末期の弘化二年（一八四五）、豊前国田川郡彦山村英彦山に位置した「靈仙寺」にて、鷹羽寿一郎の三男として誕生した。鷹羽家は代々、座主家執当という寺の重職にあつた。座主とは住職の最上位の別称であるのでその世話役と言つ

州生まれで、明治五年（一八七二）、二十七歳の時、古市の三大妓楼の一つ、備前屋の主人となつてから彼を中心として、明治十九年（一八八六）「神苑会」を結成し、日本の総鎮守として伊勢神宮を、その門前町として宇治山田（現、伊勢市、明治十二年に宇治と山田が合併して町となつた）をそれにふさわしい「神都」として、電力、交通網、金融など総合的に整備したことは、伊勢では伊勢市民に語り継がれていて、正に、「（近代）伊勢を創った太田小三郎」と呼ぶことが

たところである。同寺は小倉藩が所管していたけれど、日本三大修驗の靈場として神仏が習合した別格

本山であつたため、小倉藩からは緩やかな自治が認められていた。

靈仙寺を所管する小倉藩は、初代藩主小笠原忠真ただざねの母が家康の孫にあたり、西国譜代大名の筆頭として幕臣中の幕臣であり、幕府を補佐しなければならないという強い考え方をもつた佐幕(幕府を補佐する意)思想が強かつた。しかも対岸には尊王(尊皇・勤皇・

勤王ともいうがここでは「尊王」に統一する)攘夷派長州藩の下関がある関門海峡に面した海路交通の要衝、門司を守護する徳川幕府の大きな役目も担つていた。

反面、「靈仙寺」の始祖は皇族の出であり、もともと尊王思想が強かつたが、幕末には座主の母が閑白一条忠良の息女で三条実美さなえの祖父公修きんしゆうの養女、つまり、実美の叔母に当たることなどもあり、公卿との結びつきも、そして尊王思想も一層、強固になつて

いたのは容易に推測できる。

### 三条実美

このような背景の中で、幕末の混乱から明治維新を主導して明治政府最初の宰相、太政大臣となつた三条実美(以下、実美という)と匡一が深く関わることは自然の成り行きだつた。改めて、実美について紹介する。

実美が誕生する天保年間(天保元~十五年「一八三〇~四四」)は、国内では大飢饉が発生(天保四~十年)し大いに混乱している状況にあり、国外では中国「清」がイギリスとアヘン戦争(天保十一~二年)に大敗し、不平等条約が締結され衰退している状況にあつて、正に内憂外患の有様で、国内各藩や民衆の不安が幕府への不信感として高まつていた。そして、朝廷でも長年、膠着した摂関政治(一部の家柄しか政治を司る

摂政や閑白になれない)制度への不満が鬱積していた。

そのような背景の中、天保八年(一八三七)、実美は、父、贈右大臣実万さねつむ、母、土佐藩主山内豊策の娘紀子の四男として生まれた。匡一より八歳年上であ

る。三条家は元々、坂本龍馬がいた土佐藩山内家と縁戚の関係にあつて、また、毛利家やその領国である周防・長門とも因縁があり、のちの行動の基礎となつてゐる。三条家の家格は摂関家に次ぐ清華九家の一家で、左・右大臣の下の内大臣止まりという身分であつた。この年には、日本の攘夷派がアメリカの商船モリソン号を砲撃した事件(モリソン号事件)が勃発した年であり、攘夷思想が高まつてゐた時期である。



「橋本景岳と三条実万」(国史絵画 神宮徵古館蔵)  
右が三条実万

その後、匡一が誕生した弘化年間(弘化元~五年「一八四四~四八」)になるが、米・仏・英などが通商を求める外力が高まつてきた中で、続く嘉永二年(一八四九)は孝明天皇の御代となり、同年、伊勢神宮では第五十四回式年遷宮が行わされている。嘉永六年(一八五三)、黒船が来航して開港を要求したが、幕府は米国艦隊来襲に備え、山田奉行に神宮の守備を命じている。続いて、安政地震が発生し、さらに不安定

な時代となつた嘉永七年・安政元年(一八五四)、元服したばかり(十七歳)の実美が二条家を継承する。

安政五年(一八五八)、彦根藩主井伊直弼が大老となり、勅許を得ないまま、米国と、続いて蘭・露・英・仏と修好通商条約を締結したことで朝廷との関係が悪化した。直弼は、それを批判する勢力や幕府を指弾する尊王派の排除・弾圧を行つた(安政の大獄)。翌年には収束したが、この時、実美的父三条実方や吉田松陰が断罪されている。

### 匡一の幼年期

同年(安政五年)、匡一は十三歳を迎え、英彦山の南側豊後国日田にあつた広瀬淡窓が開いた日本最大級の私塾「咸宜園」で、のちに明治を創る男たちと学んでいた。安政七年・万延元年(一八六〇)、井伊大老が暗殺された(桜田門外の変)ことなどから江戸幕

府は幕藩体制を強化するため、公武合体が強く主張されるようになる。公武合体とは、元来、幕府は朝廷から政権運営を委任されていて、朝廷と幕府は一体であるとの思想で、朝廷と幕府の繋がりを強化して、幕藩体制の延命を図つたものである。

万延二年・文久元年(一八六一)には、ロシアが対馬を占領した事件(サドニック号事件)が勃発し、諸外国の脅威が迫つてきている。翌、文久二年(一八六二)、公武合体を推進した老中安藤信正に反対した佐幕派の水戸藩士が安藤を襲撃した(坂下門外の変)状況の中で公家の岩倉貞視が公武合体を具現化し、孝明天皇の妹和宮が将軍家茂に降嫁することになる。

一方で、長州藩は通商条約を破棄し、外国と一戦も辞さず(破約攘夷論)という強行な考えを持つていたが、薩摩藩島津久光は尊王の考えはありながらも政治は幕府が行うというのが考え方であつて、国論は時期に伊勢の的矢湾にイギリス商船が入津することがあり、鳥羽藩は伊雑宮の防衛を命じられ、伊勢でも外圧を感じるようになつてきた。

このような情勢において、安政の大獄で断罪された攘夷派三条実方の子として実美(二十五歳)は評価されて登場する。実美は元々、攘夷の考えが強く公武合体論者でもあつたが、幕府の政策に失望し、岩倉貞視の排斥、徳川政権打倒と王政復古の考えが醸成されてきて頭角を表し始めている。

文久三年(一八六三)になると、攘夷論は過熱の一途をたどり、攘夷派公家が朝議を支配し、幕府に攘夷実行を迫つた。実美は、縁戚関係にあつた土佐藩

と地縁があつた長州をまとめ、薩摩藩に圧力を掛けたが薩摩藩との亀裂は深まつた。同年、長州藩が単独で馬閂海峡(現、関門海峡)を航行する米商船を砲撃(下関事件)したが大敗した。この結果、長州藩は藩政の再起を願い、その命運を高杉晋作に託した。晋作は下関を拠点としていた長州支藩清末藩の御用商人、小倉屋の白石正一郎の支援を受け、同年、「奇兵隊」を創設する。

白石正一郎は、海上通商の要衝であつた下関の荷受問屋「小倉屋」の大年寄であり、尊王敬神の精神に溢れていた。そのような彼を慕つて、攘夷派の藩士や公家ほか、薩摩藩士も小倉屋に出入りするようになるが、同じ考え方を持つた英彦山の門徒たちとの交流も形成され、次第に長州藩との連携に発展した。また、正一郎は薩長の交易に助力し、万延二年(一八六二)、薩摩藩御用達となつて、薩長同盟のきっかけも作つてゐる。また、正一郎の末弟で、同じく下

関の豪商であつた大庭家を嗣いだ景明も同様に、尊王の志士として活躍をしている。匡一より十四歳年上であったが、明治初年には匡一と同じく太政官に出仕したこともあり、その後、太田小三郎となつたのち、景明の二男(明治七年生)を養嗣光灑(みつひろ)のちの京阪電鉄社長として明治八年に迎えている。

### 実美と匡一の出会い

振り返つて、前年の生麦事件に端を発して薩摩藩はイギリスと鹿児島湾にて激突した(薩英戦争)。それは勝敗を分けたが、国力の差を痛感せざるを得ず薩摩藩は開国派となつた。幕府と同調した同藩は、実美ら破約攘夷派の七公卿および長州藩を京都から追放した(八月十八日の政変)。

追放された七卿は奇兵隊の警護のもとに長州藩に到着した(七卿落ち)。また京都を追われた尊攘派は追放した(七卿落ち)。また京都を追われた尊攘派は

(正応坊観道とも)を含む尊王僧十三名を捕縛して藩内の攘夷派を一掃した(英彦山大検挙)が、匡一は実美の命により京都など各地を探索していたため難を逃れている。

続いて元治元年(一八六四)、京都に潜伏していた長州・土佐藩士が新選組に襲撃され(池田屋事件)、京都で内偵していた英彦山門徒が在京の小倉藩に捕縛・処分されているが、後、京都を追放された長州藩勢力が会津藩主京都守護職松平容保らの排除を目指して挙兵し、京都市中において市街戦を繰り広げた(禁門の変、蛤御門の変とも)。その時、英彦山の修験僧も参戦している。その結果、長州藩は御所に発砲したため朝敵とされ、一回目の長州征伐が計画された。同時期、攘夷により発砲した報復として英・仏・米・蘭四国連合艦隊が長州に来襲し、圧倒的な武力の差によって長州への上陸・占領を許し、大敗を喫した事によって、高杉晋作ら長州藩内の攘夷派

安全地を求め、英彦山にも參集している。この頃、長州藩は英彦山門徒との交流を深めている。実美はこの時、官位を剥奪されながらも急進的な尊攘活動や提言を行つて人心を集め、若くして王政復古の時代にリーダーシップを大いに發揮している。

前述した通りであるが、三条家は英彦山座主家と縁戚の間柄であり、同じく尊王の志をもつてゐる英彦山門徒が下関に隠棲した実美を慰問し、英彦山の現状を報告したが、その中に十八歳の匡一がいて、実美と初の目通りが果されたと推測している。それらの結果として、実美ら攘夷派公卿と尊攘派の長州藩、尊王派の豪商白石・大庭らと英彦山門徒との強い連合が成立した。

同年、長州藩と連携した英彦山門徒は攘夷に消極的な小倉藩を内部から突き崩す計画をしていたが、内部告発により小倉藩家老小宮民部が英彦山を急襲し、座主をはじめ、匡一の兄、淨典こと正応坊淨典

は大いなる困難を極める。

### 五卿落ち

元治二年・慶應元年(一八六五)、第一次長州征伐は長州藩三家老自刃により戦争に至らなかつたが、奇兵隊には解散命令が下り、長州藩内でも佐幕派が台頭した。そのことにより長州に隠棲していた尊攘派七卿のうち、実美を含む五卿は、筑前国福岡藩(筑前藩)の管理下にある太宰府へ移動した(五卿落ち)。

太宰府天満宮は当時、安樂寺天満宮といい、前別当は三条実万と從兄弟の関係にあつたので、太宰府に落ち着いたのは一層の身の安全を願つたものである。太宰府では、実美は長州藩を救うため薩長提携を決意している。また、この太宰府を拠点に五卿の側近で土佐藩士の中岡慎太郎は、匡一らと共に長州・薩摩・京都間を奔走し、のちの薩長同盟の締結

や三条・岩倉の提携に尽力していた。坂本龍馬が主導したと言われる「薩長連合」は、実美や中岡が太宰府にて画策した一面もある。

その後、高杉晋作は藩内でクーデターを起こして佐幕派を一掃し尊王攘夷派が藩の実権を奪取している。

### 英彦山義僧殉難

慶応二年（一八六六）、匡一は二十一歳を迎えた。年初には、土佐藩土坂本龍馬、中岡慎太郎、土方久元（のちの神苑会評議員の一人）の仲介によって、薩長同盟が成立し、薩摩藩の援助により長州藩は最新の軍備を整えられ、実美と岩倉具視も連合して、明治維新へと大きく動き出した。

幕府軍対長州藩が開戦し（第二次長州征討・四境戦争）、その中で小倉藩は征長総督の老中小笠原長行同盟が成立し、薩摩藩の援助により長州藩は最新の軍備を整えられ、実美と岩倉具視も連合して、明治維新へと大きく動き出した。

の指揮下で参戦した。これら戦闘はいずれも長州藩が圧勝したが、その最中に将軍家茂が逝去したことによって第二次長州征討は終戦となつた。  
しかし、小倉藩はなおも戦いを続け、小倉城に火を放つて抵抗を続け、小倉藩が捕縛し幽閉していた英彦山の座主をはじめ尊王僧十三名のうち、匡一の兄、淨典ら六名を斬首した。この時、匡一は諸国を流浪していたが、このことを聞き、急遽、英彦山に戻り、衆徒と力を合わせ遺族の救助に専念している。同年年末には徳川慶喜が十五代將軍になり、孝明天皇が崩御して幕末の終焉を迎える。

### 実美の復権

慶応三年（一八六七）、五卿は太宰府で新年を迎えた。第二次長州征伐も長州藩の勝利で終結した後、高杉晋作が病死（享年二十八歳）した。この頃から開

国を求める諸外国を打ち払うという攘夷派の考えは、日本が開国相親して自主独立する幕府の思想に近いものになつていていたが、幕府権威の失墜は著しくなつていて、遂に、徳川將軍慶喜によつて政権が朝廷に返上された（大政奉還）。これは尊王派の活躍により、ようやく成し遂げられた偉業ではあつたけれど、これを画策した維新の立役者、龍馬と中岡慎太郎両名は京都の近江屋で暗殺されてしまう。

その後、王政復古の大号令が宣言され、ようやく

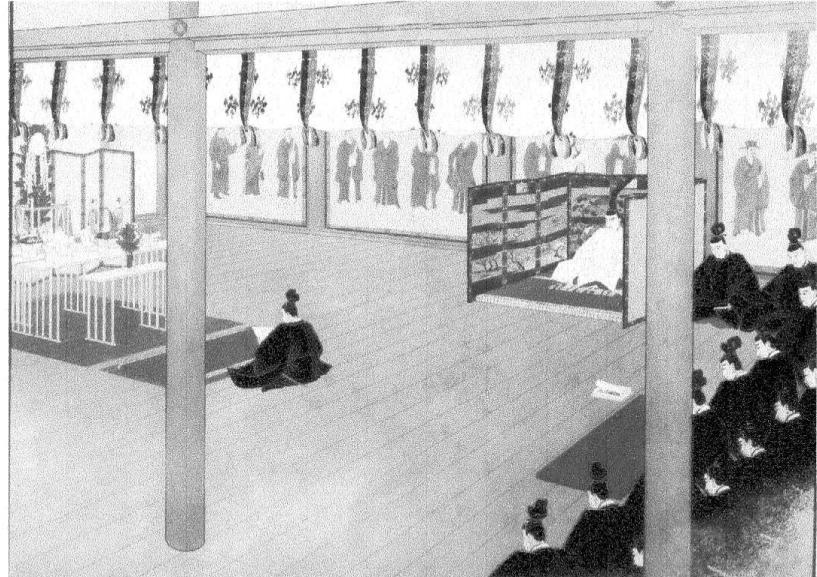
明治政府が樹立することになる。その時、実美ほか尊王派公卿達や長州藩の復位が認められることとなり、実美は政治の表舞台に復帰して成立した新政府で議定となつた。

皇は十五歳、実美は三十一歳、匡一は二十三歳だった。  
勝利した官軍政権は、旧幕府の徳川家に対し厳しい処分を行つたため旧幕臣の反感を買ひ、「鳥羽伏見の戦い」を発端として、「戊辰戦争」が始まり、「上野戦争」などを経て、その戦いは明治二年五月十八日に「箱館戦争」で終焉を迎えるまで続くことになつたが、政府軍はいすれにも勝利し、東国平定の基礎ができた。

戦乱の最中で新政府の体裁も整つていなかつたが、同年、早くも神仏判然令が発布された。神仏習合を禁止する神仏分離令である。これには英彦山出身である匡一の調査が大きく寄与していたと思われる。同時期、神仏混合だつた英彦山の靈仙寺も実美の助力や匡一らの努力によつて、「靈仙寺」を廃し、後年、現在の「英彦山神宮」と改変されている。

慶応四年・明治元年（一八六八）、この年、明治天

### 明治維新



「五箇条御誓文」(国史絵画 神宮徵古館蔵)御誓文を読み上げる三条実美

条の御誓文」が発布され、現在の内閣に当たる太政官制が制定され、国の権力を太政官に集中させ、立法・行政・司法の三権分立を図った。実美と岩倉は議定兼行政官輔相に就任し、江戸を東京と称して、天皇が即位して明治と改元し、明治新政府が樹立（明治維新）された。

政府では、総裁、議定、参与の三職による最初の会議が行われた。総裁には有栖川宮熾仁親王（後の神苑会会頭）が、副総裁には実美と岩倉具視がなつた。この時、匡一は実美の「従士」に任命されて、その活動は公に認められることとなつた。「従士」とは明治初年に明治政府の太政官に登用された官吏をいうが、今で言う、首相秘書官あるいは補佐官と言つたところで、極秘裏に情報収集や水面下での活動なども行つたと思われる。この時、明治天皇は江戸に行幸したが、この行幸の背景には匡一のお膳立ての働きが大いに寄与したと推測している。

この年に早くも伊勢では山田奉行と宇治と山田三方会合の自治組織が廃止され、奉行所に度会府が設置されている。

### 伊勢に定住

明治二年（一八六九）、実美は右大臣となつたが左大臣は空席であつたため、事実上のトップ続投となり、さらにリーダーシップを發揮する。三月には天皇が二度目の東京行幸を行い、京都に戻らないことで事実上、江戸に遷都した。天皇の行幸は江戸幕府に替わつて新しくなつた為政者である天皇を国民に広くアピールするデモンストレーションでもあつた。この行幸の途中、九月に第五十五回式年遷宮を迎える伊勢神宮に明治天皇が天皇として初めて参拝されたが、これもまた祭政一致発揚の一つであつた。そのお膳立てのため、匡一は、何度も伊勢に足

を運び、山田奉行所や鳥羽藩に出入りして行幸行程の情勢について情報収集し、実美に報告することでの天皇行幸が安全にかつ滞りなく遂行された。その結果、匡一と伊勢との繋がりが強くなつたが、伊勢での定宿は「備前屋」だつたに違いない。

何度も通つた定宿「備前屋」では、伊勢の尊王派との交わりも出来てきて、その後に神宮制度の改革を果たすことになる内宮権禦宣だつた浦田長民などとも交流を深め、伊勢神宮の将来を語り合い、夜を明かしたこともあるたのではないか。こうして築かれた人間関係がその後の伊勢を創る事業（神苑会ほか）の基礎となつてゐる。また、匡一の実直な振る舞いが、跡取りのなかつた備前屋の女将「まつ」に見初められたのもこの頃であつたと思われる。

同年、版籍奉還が発令された。全国の藩が所有していた土地（版）と人民（籍）を朝廷に返還するという明治政府が行つた政治改革である。「府」は東京、京

都、大阪に限ることとなり、度会府は度会県に改称した。

#### 次への始動

明治三年（一八七〇）を迎え、天皇に神格を与え、神道を国教と定めて、日本を「祭政一致の国家」とする国家方針、つまり「大教」を宣布（大教宣布）することになるが、この国家方針は実美によつて考案され、後に、それを具現化しようとしたものが、匡一こと、のちの太田小三郎が推進した「神苑会」だつたと推測している。

そのような状況の中、天皇は海路による大阪行幸を、そして、その途中に二度目の伊勢神宮参拝を計画していたが、道中の海上は外国船が頻繁に出没して緊迫した状況にあつたため、安全な行幸を達成するためには充分な調査が必要となり、そのため、この頃、匡一は伊勢に居を構え、常駐することになつたのであろう。

明治四年（一八七一）、浦田長民などによつて神宮制度が大きく改革された。その内容は、神職の世襲や御師の廃止と彼らによる大麻配布が禁止されたことなどであるが、御師で成り立つて伊勢の町は激動の時代を迎える。一方、明治政府は正院・左院・右院の三院と外務省以下八省からなる太政官を設置し、太政官制度における長官として太政大臣（今まで内閣総理大臣）が置かれたが、明治最初の宰相、太政大臣に実美がなつた。その後、明治十八年（一八八五）に太政官制が廃止され内閣制度が発足するまでの十四年間の長きに亘り、明治政府を牽引し続け、また翻つて、幕末から明治維新までの間も明治政府樹立に奔走し続けたことは特筆に値するだろう。明治維新の立役者といえば、坂本龍馬、高杉晋

作、伊藤博文、西郷隆盛などが語られるが、実美こそ、「近代日本を創つた三条実美」と言われるに相応しいように考えるが、その活躍があまり知られてはいないのは残念である。

海路などの安全を確認したであろう匡一の働きによつて、明治五年（一八七二）、明治天皇は大阪巡幸の際に、軍艦にて鳥羽港に入港し二軒茶屋から御上陸、外宮參集所にて御一泊の上、五月二十六日、伊勢神宮両宮に二度目の参拝を果たしたが、同行者の中に西郷隆盛もいた。

余談になるが、明治十三年の天皇御参拝（三度目）の際には旧御師龍大夫邸（現、大豊和紙工業株）が行在所に当たられ、記念碑が建立されている。この頃には実美は、明治政府が祭政一致により国民を統合する理想（大教）を実現するため、伊勢神宮を日本の総鎮守として、また、その門前町宇治山田をそれに相応しい「神都」として整備する。即ち、



太田小三郎の肖像写真  
(伊勢市所蔵)

「神苑会」設立や交通網整備についての具体的な施策を匡一と共に始動したと推測している。合わせて、この年には新橋横浜間鉄道の運行も開始され、交通手段も大きく変わつた瞬間であつた。

明治天皇の二度の伊勢神宮参拝など、一連の大役を滞りなく成し遂げ、一段落がついたこの年（明治五

## 参考文献

- ・『伊勢を創った太田小三郎』 秋田耕司 二〇一九年
- ・『宇治山田明治年代記』 三重県郷土資料刊行会倉田正邦
- 校訂 昭和五十七年
- ・『校訂伊勢度会人物誌』 川端義夫校訂 昭和五十年
- ・『神都名家集』 三谷敏一 明治三十四年
- ・『三条実美維新政権の「有徳の為政者」』 内藤一成 平成三十一年
- ・『幕末秘史英彦山殉難録』 高千穂有英 昭和四十年
- ・『維新史稿日子山義僧伝』 江島茂逸編 明治三十年
- ほか

年)、匡一は、定宿「備前屋」の女将まつの申し入れを受け入れ、備前屋「太田小三郎」を襲名することとなるが、これには次の「計画」が秘められていたと思われる。その後の小三郎の活躍は前述通りであつたけれど、小三郎が「伊勢を創る」にあたつて、実美との結びつきはその後、さらに強く、深くなつていった。まずは、備前屋の家勢を挽回した上で、共に働いてくれる伊勢の仲間たちと学習討論の結社(交修社)を設立して、「伊勢を創る太田小三郎」がスタートすることになる。

## 謝辞

伊勢市教育委員会事務局文化振興課ならびに小三郎研究家飯田ヨシ子氏にご指導いただきました。深く御礼申し上げます。

(あきたこうじ)